



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

頭書古今和集卷

春卷下

浅草文庫

よき人あらず

遠山探せ見えけ
あまのあまの
のころろふちうと
よのころろふちうと
すもわいのさるれ
はちうとさるのほろ
おきくかあうちう
さるよとあ

春巻きたる山探せふころろふちうとあまのあまの

霞かたナビイテ其カスミ色ウツテ見テアノ山探バ

ナガキラウ上テヤラ霞の色がカタキタ

おてもいよあていあふ物かふはと探せよひまの

○千リカツク探せ向テハラウキスニ待テクシト云ノラ

入テソレデハレテモキスニ留ルモノト云ハ何ラ探ヨリマ

みやハハワのふりも
やうかしくまきハ
まきまきまきま
まの上の羽助け
てまきまきま
まきまきまきま
まきまきまきま

サカモトノガヤよもつグンデハモウ母中ニ桜ヨリニサカモ

ハアルニニ惜ニ早ウキルハツガリガアハツラ桜キツキヤ

のりあふまきまきまき桜をあ育てよの中をこれれらるる

○ワウツテサキト残ツテアウヨリサハリト残りナシニ

早ウまきまきまウガサアハハカウナクガヤ桜花ハ世

中トモハソウタイ何デモ長ウアバカススレニイ

ツガワルイ物ナレバサ

此里おたぬいあまきまきまきまのまかひにむねをなして

○コヨヒ此里デテ上ラウヲガヤ此ヤウモモシロイ桜花ノ

古ニノ一

千九ノギレニ内ヘイヌルヲバもヒダダスニサ

らきまきの母中にもまきまきまきまきまきまきまきま

○桜花サ咲イタワトあつたウキニハヤカタ一方カラまきテシ

ハウタイ人間ノ生々ヒダハナシモナイモノガヤカソニ

一アヨウ似タフカナ

修正通眼すよきそむくうら

うらうらののあ

拙意羨あちり般んちりんこそあやふら乃あまもふ

○遍照師が大方ヲ花ヲ見ニまテウシラレテアラウトモフ

らきまきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも
まきの母中にも

やうきくへんごう
のん(き)

テ毎口一テトモ見マケケテ見エヌカハモウ大
方見エヌデアラサスレヤヨイワ桜花ヨチルラ豫手
ニ教テレウサチラズニアツタテ在野ノ人が来テ見モ
セヌニカヤウヨミトユエ自カテハ上

そあめんハ分の
系の水ひさき
跡子存り

モ林院あそまるるのさだちのむをよみてよ
め

そらく法師 奉増

桜花ノチル野ヘキテ見ル 時節ハ春デアリカカラ雪解
キテ上ツテチキキエニライキニ雪ハワラニ消ルモ

古ニノ二

このさハせき
あり

サテモアツタララヤ 此ヤウニチラス風ガ運苗シテ居
ル上ヨバタヅバ知テ居ルモノガアラフ 誰ガ知テ居ルハ
オレニ教テレレイソコへ行テゾブニ恨ミライハフ
うまんめんもく 櫻の花とよめ

上子あぐよの中
そこのうらたは

さちくは風のやどるは 推るあるか子とくまねてうろこん
○サテモアツタララヤ 此ヤウニチラス風ガ運苗シテ居
ル上ヨバタヅバ知テ居ルモノガアラフ 誰ガ知テ居ルハ
オレニ教テレレイソコへ行テゾブニ恨ミライハフ
うまんめんもく 櫻の花とよめ

るせいりう

千林三初ニノ
ハざんが花の

をすまへしうまの
こしは解のあまき
まは希のうま
んとせきをれ
程世すまのうま
あまきおまのうま
子のうまおまのうま
あまき

いささか我まぢのあんなさうあつるまはまきあまの
○此う三桜ノ早ウをテニウムアヨイ料簡ヤドレ
ヤ桜ヨオレモイツヨニヌテトウナリトナツテニマウ
人トモモノモ一サカリ盛リナ時ガアツテソがるギテオ
トロタナラバ老ボレテニツレモナイヤウスラ人ニ見え
テアラウホトニ
あひあはるる人のまきくうまのまき
よまてまきさきくうまのまき
はくまき

古二二三

ちぢぢぢぢぢぢぢ
あはれぢぢぢぢぢ
あまきぢぢぢぢぢ
中あはれぢぢぢぢぢ
くまのま

このちぢぢぢぢぢ
あまきぢぢぢぢぢ

一のり天まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
○此間ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
日一ハマア待テミテソレテゴサラスハキルナラチツぢぢ
ヨイ桜花ヨ大カタ今百ハサウナモバチヤ
山のまきくうまのまき
まきあまのまき
○霞ハナセニ此まき桜花ヲカクスヤラユリトミルフナラス
尺セメテハ枝カラキルアヒタナリ尺ニア見ヤウモノラツ
るサハ霞ヲ見レヌ

二の下子典坊因
 手相好とて由典
 竹ハ四位北ハ性也
 下子書ニ万葉事
 其集位存の今
 必一ツを以テハ
 一ハ女もく志
 るを福也

こもろこ形ひくまがひるも射子風かあ
 じくあり一あくのこけうもあひぶとれ
 梅のちりぐさあはけらとてよあ

後京もりの朝臣

たれあてまの初へまあぬまふ御梅もつろひま
 ○ワニアバイガ足ウテ帳ノ帷ヲオロテヒツコモツテハカリ
 居テ春モイカヤラ日遍テイクモシラヌニ咲多
 見ヤウトあつテセツカク持多桜モハヤユウニウツ
 ウテシウウワイノ

古ナレ

ミチヤ
 る所のどくあ
 るをよめ

東宮の雅院あきさるれを乃かハ水ま
 里てあはれらるをえくよあ

すぐれと世

枝すもあごちちうあそあれは落てもあはれは
 ○水上へチツテ流レル桜をガアレトツト涙ノヤウニ見テ枝
 カラモモロウあそ花チヤヨツテ下へ落テモ又月クア
 ノヤウニモロイ水沫ニナルガヤウ
 梅のそれあらるをよあ

ついで

万葉集ハ殊ニ難ク
要ノ内者ニテ
子書ノママニ
トナシテ

トあふべきやあふぬ梅をよる歌をよまづらんをく
○トモ此ヤウニ早ウキルクラ井ナラバ一向ニシヨテカラガカ
ヌカヨイニナセナカズニ井ヌン梅花ハ此ヤウニ早ウキ
テ見テ居ルヨクニテガ心ガサウトシテオチツカヌ
おまゝにあふぬの説はとわごやく此行ハつづれとあ
群のまををひく又まきえ俗を考へをそく啼ふ
ア
梅のぶらぶらとあふぬのまねと人のひをまじよ
や

心ガサアチモガキヤ
ナセトミ

梅をよるあふぬともあふぬ人の心を風も吹あふぬ
○オレ梅花ハ早ウキルモノヤ花名ハヌソヨリハ人
心ガサアチモガキヤナセトミ梅ハ女風ガフカチバツ
タニチリモセヌカ人心ハ風ラウニテモマズニ早ウキ
ル物ヤヤサテ 梅枝下ウのほろろく
さくらら梅のちをよめる
まの友のう
ひまろこれひろのどろきまのよまづらんをよめる
○日ノ光川ドカナユリトシタキク白チヤニトウニデ

ひまろとハ天ノ
月ニヤニヤと
辞ハ天の
クハ
梅の内
あまき
形ノ天
らんと

きざりハ浪をす
こころニのこころ
不浪のこころ
とらふもあまも
失ふもわのす
のこころあまも
とら

○桜ノ千ルヲ惜ニヌ人ナキバ 此ヤウニ此セツ春雨ノフルハ
世間ノ人ノ桜ヲラシテ泣ク子ミタカイ

真子院奇舎のうた つつゆき

○桜ノ千ル井ニ風ガ吹タテ 其花ガレバ多ク中テサウケキキ
ハチノ浪ノ多クケキヤソレテ海ニチゴリトミガヤ其
ガリノ浪ガタツキヤカネヲチラセタ此風ノアトチゴリニ
水ナリ所セヌ空ニ浪ガタツキ
あまのこころ此津奇

桓武天皇の延中
子山城の七長都
てはこれいば奈
はかたては
まわいよふくを
まわいよふくを
のこころのこころ
あまのこころ
羽衣やうまんか
一きこのあまの
こころのこころ
くろくあまのこ

あまのこころあまのこころの都中も色はらるる花はさか
○フルイ昔都ニカテシウタ此宗良ノ京モヤリ色音

ニカハラス 都テアツタ時トホリニ花弁イナイ

妻のうらみこころあまのこころのむねさだ

花の色はあまのこころあまのこころとふねすあまの山風

○花の色ス 霞中ニヨメテオイト見セヌ所セメテソク香ラ

ナリトモ霞中カラヌミダシテキテコトモニホハセイ

妻ノアノ山ノ風ヨコヤ

寛平のあ付きまのの宮は奇舎のうら

花のついでんや
さくらあつり
かきりう

上下のあつり
でしつり
かきりう

孝性法師

花のついでんや
さくらあつり
かきりう
○花のついでんや
さくらあつり
かきりう
ツロヒヤスウオウイ

歌あらず

よき人

春の色ハドコモカモヒラマイナバ
イキワタタ里トイキ
ワタラヌ里トノ
ワケケルハ
アノミエ
ドウ云フテ
花ハ咲ク

古二ハ

万葉集
三輪山
あつり
さくら
あつり
かきりう

三輪山
あつり
さくら
あつり
かきりう

トサカヌ所トガアルヤラ

孝のあつり
ついでん

三輪山をさくらあつり
かきりう
○サテノ三輪山ハキツツ霞ニ
ダフカナ
コノヤウニ
アカク
カク
アノミエ
ドウ云フテ
花ハ咲ク

よき人

三輪山をさくらあつり
かきりう
あつり
さくら
あつり
かきりう

すうすうのあめが
まをんこのこ
ろをくまあま

○ドヤケフハ日クシレデモ 此春ノ山ベラカケアルイテアソ
グン 日カシタ上テモ 花ノ陰ガササウチカイ イクラモ
花ノカゲガアレバ モシ暮タナラ サイハチヤ花ノカゲニト
ラウロサ あげハキハキマてけハ何げとおわくいおれ
おま子けの流るるーまおれどいお子まをす

春のうらさくあめ

りまてう野ばすん乃あられむーちんばす母もをる

○花ガケラズハイツテコノ野辺ニ心ガカヒテ居ルテアラウ
モシ星ガケラズニアツタスバ 子年デモ此野デタテウヤウニ

古二九

あつちのあめが
まをんこのこ
ろをくまあま

あはレル

野ーら

よこんあま

春どふ春のさうらあつちをめぐりてとんんとハ命あつち

○花ハ今年ツテモ 又来年カラ後モ 春ゴト盛アエラウ

ケレソ盛リニ逢テ見ルハコチ令次オチヤワイナオ

忌ガカリガ毎年アツテモ 命ガナケヤ 又ト見ルフナ

ラヌサウあハア残リオホイ花ガヤ

春のど世のはねあつちをくまあまをす

○花ハツツテニウテモ 又春ニテバ 年とお替ラス 定シ

あつちのあめが
まをんこのこ
ろをくまあま

まき枝集六折又
ハ殿膳后子一本と
一枝と又と

一本子枝とあり
るゆきとありつれ
あつてもある

テ嘆ク物チヤガ世中が花トホリニ定メテカラヌ物
ナズスガシテキタ昔モ又フタビカツテクルテアラウニサ
世中へ入るタ昔ガフタビカハルトニツコハナイ

吹風ふあつらんつほるものあふ此本ほもきよとよきと

○吹テクル風ニ軽シイヒツケル物ナラ 此花一本ハ
ヨケテ吹テクルトイハウニサウイフコナラヌモノナシヤド
ウモ散テモセウコガナイ

ウモ散テモセウコガナイ

梅もさあめれあふ昔のあきほるをさるるるる

○此花ヲ詠ヒテ折テ生テオイト 来タナラハ見セウト也

古二十

あまがとほり
りきかのし
諸木のあまが
よんてふと云

ウテ待ツ久モ来モセヌニア、鶯才モシロウ鳴ニ弁タアツ
タラ花枝ヲオハ折タワイ サテモラレイコラニタコトカナ
梅又が来スラ弁ナラ 折ラ子ハヨカツタニ

こぬかのあまが、あまがせさるふとつらさあり。

○ヨニ春サクヤハイウアルガ何ニ花テモ皆アタナ物ナド

ソレテモ誰ガ来ルヤアダナト云テ トシト見カキツタ者
ガアルゾ アダナモヤヤトハ誰モイヒツ 嘆カバヤツル
リ賞詠スルガヤ 待材の記をうら。

なまびく山はる
の雲よりいづ
つくま

新撰万葉集の
友子花を教授一
冊著録は風を
そまといふは
ちまといふま
あり

春あはれのちばりよとつふた子ひまのさればけつも

○霞の色がイロい言えん人ソノ霞ノ夕チイテアル中ナ山

ノ花ノイロガ霞ヘウツクカキ

在系え方

かたきまの山はまをれど吹あそ風をさるる秀ぞす

○霞のまッテアル春ノコノ山遠ウミルケルカクベツ遠ウ

モナイカシテ吹テ丸風ハ花ノホヒガサスル

この前には諸説ともすこしちがふ

うらうらとさそえてあそ

古二ノ十一

あまの山はる
の雲よりいづ
つくま

又ほぬ

さ見ればなすまごううらうらとさそえてあそ

○ウラウタ花ヲ見バアヲヤトホウ心ガ花ニシココデ

コナ心ニテカサ花ノ色ニウツタワイ 此ウツ花ノ色ニウ

ツタヒラトウツ類イロニハダスイ人ガ知ラウモシメヌホ

ニ人ガ知テハアメリヌウラヒイフガヤ

おまよるうらうらとさそえてあそ

歌考の決

よみんくわび

うらひすの鳴野辺とよ基て見れば授ふ花子風を吹る

うひすを風の
よおまらん
わー

○ 鶯ノチ野へ来て見ぶトゴノ野モノーウツウ花ラ

風か吹テテスワイ 鶯か惜シガツクハダウリギヤ

○ 鶯ノチ野へ来て見ぶトゴノ野モノーウツウ花ラ

吹風ノチまきてうとよ鶯ハハレヤハ赤子ノ声ヨル
○ 鶯ガオレガチカクノ来テ恨メサウニ鳴クガソチハ花チ

ルカ惜ウテウラミルテアラク吹テク風ヲ恨メテサオレ

ガア花チヨツトナリテ手トモフレタナラコソオレラ恨ミ

ヤウケレオレハ手モフレハセズヨスレヤコチガ知ヲテナ

イワサテ

古ニ十二

曲傳信子輕長

鶯ノチの垣ノ邊ヨリ鶯ノ声ヲ聴ク

○ 鶯テラ花ガ惜メテ泣ケテテスニ上ルモノナラコモ鶯

ニオトロウカイ鶯ニオトラヌホド泣ウケレトナレボ泣テモ花

ハトウモトニラスワイノ

仁和の中納礼ミヤスん所の家子今合セむて

後系好彦

鶯ノ声ノチヤヒビキキキキキ
○ 霞ノツツテアルノ立田山ニ鶯ノチノ声ガスルガ花ノチルコ

○ 霞ノツツテアルノ立田山ニ鶯ノチノ声ガスルガ花ノチルコ

今のサコノ後彦と
あつたろう下ヤ
後系ノのちがひが
うつわのつらひやく
假名もつらふみ
二人あそぶ

六瓶子初の白雲の
とわれどわくき
のよあぢぢぢぢ
淡々ゆめゆめ
とひすのゆめ
とてくおひん
雲のゆめを
りきてあひち
をせであるは集
のゆめひあつた
やすくえんすん
るん

トガツラウ名ハヒテアノヤウニ鳴クカイ

うひすのあまをよめ

そせい

うづるハおのぐ羽風もあつてはるをてこら鳴ん

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝ヲアキラヘコチラスゴツタハ自分羽

ノアラチノ風ヲモテモノヲソラ誰ガ答ニシテア

ヤウニ恨メシサウニニキリニ鳴クコトヤラ 外ノ物がチラスカ

ナゾヤウニア 千秋ニマラハ相の殺の多きとるハバシフ
リニとの羽ハあまをよめとてくおひん

鳴かすのふとまきハ必々あまをよめとてくおひん
まこらまてあまをよめとてくおひん

あまをよめハうの子
まのそとあまをよめ
くハあまをよめとて
あまをよめとてくおひん
あまをよめ

鶯のまじ木をよめとてくおひん

そせい

あまをよめもあまをよめとてくおひん

○鶯ナシノセンモナイ鳴クカナ 今年バカリチル花デナイ

イツノ年上テモツヒニ鶯ノナクテ花ガチラスニアツタト云フナ

一

歌

あまをよめとてくおひん

あまをよめとてくおひん

○タレカトヤアセテ馬ヲリテスベテ打ツレテドレヤ見

あまをよめとてくおひん
あまをよめとてくおひん
あまをよめとてくおひん
あまをよめとてくおひん
あまをよめとてくおひん

のちのまはるの
べー

ニカウヅ せつふる京ハサヤ 雪ノフルヤウニカ ヒタクト
花ハ千ルデアラウワイ

ちよとをふら恨えん世の中子孫をまらふあまむおの

○花ノチツテユラ 何レ恨メシウコチカ身トテモ イツテ

モ世ニカウニテアラウモノカチ 花ト月ジヤニオツケ死

シユクモノガヤ 花ガカラ早ウチル上テ恨メシウヤウナイ

小孫小町

あがれとハまのち
雨ちまのち
うつらひやく
それぞあひあり
世目すまのち

まれをふつらふらふいづふ我身世やまきあやふ

○エ、花ノ色ハアヒモウウウロウテ シウタワイナウ

古ニナレ

このちのちのよ
中ゆくハまれ
まわらばる二
子つらとやあ
まのちまのち
まのちまのち
まのちまのち
まのちまのち

一度モ見スサ ロハツラテ居凡男ニイテ 心苦ナカテ

テ何トシヤシモノカタアヒタニ長雨ガワタリナトシ

テツイ花ハアヤウニア

世やうとハ男女のちさひすまふ男女の中ハこの

とせと世の中とさつらまふ此集為れあま

これとあつらふ物終小世ころはなす保氏物終

かまふ世をあらぬをあらふかひもこれ

仁和の中ねのまやすんころの家玉可合せん

くろくふあ

ろく

あがの山越、今乃
茶の茶あつやあ
ゆの地の方ありの
あつてはまふけ
とこえん全夜のも
へつてなをゆ
持まふととこえん
鬼津にまふ

とてあふんばやあまれさんあふんばと子ぬきてさうん

○散テク花ヲヲレイトあふんばトウツネヨル・物ヲフヨ

イニソレタラソノチルヲツクイツネヨルテツチイノチ

ヌヤウニトメテオカウニ

あがの山こえん子女のおやくあつらなるままそ

つらけさ けさるあま

あがの山こえん子女のおやくあつらなるままそ

○一春ノコ山ヲ越テクバドウモ道モヨケラレヌホト

花がチツクルワイアノ女等カサ

あがの山こえん
とらあつらま
ありまあま
とらあつらま
のまのま
持のま
あがの山こえん
あがの山こえん
あがの山こえん
あがの山こえん

實平、山付まきの官乃、まかたれう

まの孫子あまつらまんとつれをまあふあまあまのぬ

○此春野ノ若菜ヲウツトあつてまままアチラ

コチスチリマカウをアワカナラム所マカバキレテ

フコヨウテソデモナイ所キタワイヨヤ

山まふまうてたりけさるあま

あまののち、山付あつら下のまよと穿あやれ

あま

やどうあてまの山こえんあつらなるままのまあまあま

あがの山こえん
あがの山こえん
あがの山こえん
あがの山こえん

つらき足さう路
のあふか程ゆき
もこころをなす
多くてこころを
しゆくをわらへ

遍那花おちこぼれ
し付し

○春花ノ千九時合ニ山ニ上ツテ寐多夜ハソノ花ヲ惜シク
ト心ヲユエカ 夢ノ心ニモサをキルハツカリラミルワイ
寛平此時さまの宮乃奇合の奇

吹風と谷のあさうあさうをばい山がこれの意をえま^はや
○フキチラス風ト流レテユク谷川ノ水トガナイモノチラバ
ミ山チオクニカクテ咲テアル花ヲ見ヤウモカイ見
ヒスニイニスヤ風ヤ川ノ水モ花ヲタメニメタニワルイ
フカカデモナイモノヂヤ
志智よりうらうら女どもの花山小つりて後乃

六指下下ゆきま
あつたれまらんま
さうなとあつた
後乃のロケマ

おぢ子とハ花乃
さびくとのあそび

あつたれまらんま
さうなとあつた

借正遍那

あつたれまらんま
さうなとあつた

○チヨツトミヨツタバカリテ足モ^トスニヨソ見テイヌル人

ニヒ^トツウテイナナ藤ノ花ヨタト枝ハ折レルトモトウ

ツヒ^トツウテイトメヨ

おぢ子後の花さうらうを人れ^ミとあつた

又うらとあつた
ミ花ね

おぢ子とハ花乃
さびくとのあそび

浪まうり子に八宮
の帯にさびくさま
こころのふかみのせき
靡のまのあり

こまご子の小島が
吹ハ大和のあはれ
こまご子の小島と云
こころえ万葉あは
あまのこまご

万葉子山吹ハあは
つの子まわつるを
見まかすことよしの
山吹ハ子の子のこま
あひて愛まかしの
香にあはれどあ
花もも香とあ
まじくこめけり
あめくるとまや
出ころんわつや
らまきまこよま
かろし

あやしくさままこハ
アヤナシサキ
文無勿咲てま
あり

○コチ庭ニ咲テナル後ノ巻ラ
アヤウニ人がヒツカレしくシ
テドウモ見ステイナレヌヤウニ
ヒタスラ見ルガトウユフ
ヤラ
エイ庭デモナイニ

歌
よき人志す

いよちも吹あわやむむたちづ子の小島のさまき乃山吹の巻
○夕チノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハケフコゴカナ見事ニサ
イタテアラフ
初句をハニつとも小やすめ辞めり今うゑ今もどいふ
小島あはれ

古二七七

春あはれあはれ色もあま子こ香と入あつり山吹の巻
五、

○此山吹ノ花ア 春雨ニシテ入サツタ色モトウモイヌニ
色ガカリテナレニ 香ニシテガ雨ニシテ別ニテ
ホウ

春の香の方ハサツタ。あめあひまめれハ増カおん
山吹あやきく咲るをんとうるん君がこよひこまこ小

○山吹ハワケノ又ノ物チヤコチナラサカ又カヨイ花ガサ
イタラ見ニ来ウト 必フテ極テオカニヤツタアララニ其
染ガコヨヒニエモセヌニ咲テモ何シセモナイフチヤ咲ラ

月のつとを射
るをかねてまや
まをそぐめりあ
るかの集のころ
もつらのつらさ

五
リニトシテミタイモカヤソレバオモシロイ旅寐デアラウ
おま下句のまをそぐめりあ

まをそぐめりあ

アサミ
棒弓なるまより年月のつとをそぐめりあ

○古三棒弓春トツクテアガコト二月が早ウ多
テ矢^ヤイルヤウニハル、春ニツテカラニダナニモナイニ
サテモ早ウタツタ^{ウチ}カナ
そ月とあまはまよへ年の春^{ハレ}れあふれつるま
まの春れあふれま、世^ヨ行つたまきこぬ。

おまハ何^{ナニ}も
あまをそぐめりあ
おまをそぐめりあ
おまをそぐめりあ

やまひ子^コのてゑさうまえざりぬまよへ

つらさ

○ナホ惜^{ウレ}テ鳴^ナテモ一花^{ハナ}ハミナ敷^シテマウテ 鳴^ナテト
ル花^{ハナ}ハナレバコレモシナイ^イテヤとるテ 鶯^ウモシヒ
鳴^ナトモナウ^ウカクテアラウサウアリソチ^チニハルソレテ久
シウナカヌヤ^ヤテ 餘^ヨ我^ガモ
やまひれつ^ツた^タり^リの^ノか^カふ^フ山^{ヤマ}を^をニ^ニえ^エる^ル小^コ山^{ヤマ}川^{カハ}より
の^ノあ^アれ^レる^ルま^マよ^ヨへ^ヘ ぬ^ヌる^ルや^ヤど

花のこゝろ三月の
 こゝろ山はゆきや
 ちかづつてまねの
 影をあらうとあつ
 今のあの人ハ四月
 子母の山母のが
 ちかづつてまねの
 影をあらうとあつ
 草をあらうとあつ

春ハ一年ノ内ニイク度モ来レバ重シクツクガヤガサウハナ
 ラスルセメテ度トナリ片来レバヨケレバニモトモクモカイ
 夕夕ニ及ナラデハナイ春ガヤニシテユクサテクヨリミイ
 フガヤ當ハズ非フニ絶ス鳴テ恨ミヨヤイイカモ鳴キドコロ
 ガヤ

やよひのつらさ
 又てよめる
 又つね
 むらぎ物とハキハキとハキハキとハキハキとハキハキとハキハキと
 アノ花ガアノリ惜サニ一本ノケウテユク花ガトニコチ心カ

花のこゝろ三月の
 こゝろ山はゆきや
 ちかづつてまねの
 影をあらうとあつ
 今のあの人ハ四月
 子母の山母のが
 ちかづつてまねの
 影をあらうとあつ
 草をあらうとあつ

ツイテイウアノ女ニサモニア アホラレイフカナ ツイテイ女
 上テトメラシガモレハナイニ オホシミカヨク
 やよひのつらさ
 又てよめる
 又つね
 むらぎ物とハキハキとハキハキとハキハキとハキハキとハキハキと
 ぬれつゝあひくおつる年の内ハ春ハいくもあはじとあは
 此後急ハドツツモトへ 水目カケウト存シテ 今自ノ
 コノ西ニエルクサハニ折リシタ 春ニダイカモアルデハ
 アルニイモウ昔年ノ内ハ 夕夕ケク一日ナラデハ春ハナイ
 ト存スルニエニサ 後後ト句のまをぬす。

好撰を所すこのあ
と世のくよあり
ありま

事子院あな子事此をそのあ

又のね

ふのくもあなをなきふもたつとやすきあのかげうハ
春ヲモウ入百ガカリガヤトハん又時デ弁人花下ハ三ッテ
イヌルノカ何シトモナイガサナツレ弁人花下ハ三ッテ
ナイニニテテケケギリク春ガヤモノ

頭書古今和集巻鏡卷第二

古今和集

頭書古今和歌集巻鏡卷第三

夏奇

歌一

よまゝ人あゝず

や卯月のま
附名のつう
とあやうのす
がこまゝあまき
あり

歌中の他れあゝまゝ山肘をいつうきふうも

○コチノ庭ノ池ノ辺ナ後ノ花ガ咲タワイ 郭公ハイツ末テナ

クテアラワ

此のあゝ人のいゝくうきのめをれ人まろが

うづきふささる様を足くよあゝ

紀一

このありはらう
るまじう

附者ハあつ五月
はあはきき月あ
とてこれ八月
はあはき

あつてふととあつてふやうにあまよおれてひらりあん

○今月ニあつ按てアルハメツラレイコガヤコハナニモ見ル

人かアハレ見ブナアハレ見事ナト云フ其初ヲ方ニ按

へ分テアルニイコヒトリガサウイハレト云フテワト考ヨ

リ後ニオソウヒトリ笑タテアラウカ
○千秋云後白子まじり
とくしとよまじり

歌うらや

よまあつ

さ月まつ山附をうらやまき今もあつてこそ乃やうとあ

○郭公五月ヲ待テあつチヤガ一タ五月ニナラ子氏去年

ノ残リノ声ヲ出シテドウ今モナケカシ
○千秋云フ
ちんまきハ

古三ノ

万葉子打羽振とて羽をうと云
この傳をきハなきがまうきをまう

伊勢

五月ハナキこハあつあつ郭公あつてまきわらの一をたまらや

○時鳥ハ五月ニツタナラバモウ沢山ニツテメツラシウナイ

テモアラウトウシダツク時節ニナラヌウチ声ヲウタ

イモノガヤ

よまびと

さうき待て橋の香をうけハ昔の人れ袖のうをすあ

○五月并ク橋ノ花ノホヒラカケハニカタナジミノ人ノ袖ノ

たつ子も五月ハ
あつのあつ五月
はあはきき月
はあはきき月
はあはきき月
はあはきき月

く橋の香せう
きてヨシヨシの
かつあ一人のそ
での香あわわ
よめこの由なる
あかあう海の中
まをりぞんぞ
かきまきま
らぬ人の心

香がサスル

ソのもまサツキ有きあんな山をきき今ぞあ

○イツノ五月テタヤラヒゴロ午ニ待タ時鳥が今始

テサナクワレ

カサ紀子きいもタビ様あす時香ヤドをちつ子ヤド初ヤドらう形ん

○ヶ廿始メテ来テ一スミダエ住ツカスニ様カケテ居テ時香

ヨ定メテ宿ヲトルデアラウガコナノ庭ナ橋ニ宿ヲバカレ

カシシニタラ存令ニタウニ

おとを山とこえらる付子ヤドききヤドのふくせ

てよめ

紀友則

音羽山ヤドカキこえらるバ時香ヤド梢ヤドをうふなぐあくれる

○音羽山ヲ廿越テケバ時鳥ガアハルカテ梢テアレ今

始メテサナクワ

音羽山とらるるヤドききヤドの声のこヤドづヤド子ヤド一

ほくきヤドのヤドあてヤド時香ヤドをきヤドてよめ

そせい

時鳥ノ始メテ時香ヤドラキケバオモシロウハアレ又サ何ト

○時鳥ノ始メテ時香ヤドラキケバオモシロウハアレ又サ何ト

素性集子ヤドこ
あまけハとあれを
右のそ一羽ヤドあ
つせくヤドつせくヤド
あつせくヤドつせくヤド
るものあヤドつせくヤド
集子ヤドと云り

言のまこと扶さ
何ぞ

石上とまこところ
布曲の社ありて
幸ふてたきこと
おも雨のやまとい
そのくくやると云
うらま

ナウカンレヤウガオコツテ無益チ 其人ト云ニツタフモナイ
恋コチガスル すぐくもくハ又あり。 此書ありハ三の
句此顔子うつてて受てあり。ろなまどち又のま
あまのいそろくちまて 歌のふたことあり
いそろくちまて 郡の村をこまぶくうこそむく。 形くま

○此石上ノヤリハ昔奈良都ヲガガ 今ハモウ何モカモ昔
トハ変ツテニウタニ 郭公ノ声ガカリガサカラスニ昔トホ
リヂヤロイ 村書ありハ上吉ハ山名郡石上まありて
奈良と云くまのハ今のあまてハ石上のあまるとま

ひろく奈良と云ひあまるとま 今此世母丹波の
あまの愛宕山と云他國ゆくハ系の愛宕と云く
あり。 赤子の祝ひつと云

歌

よき人

夜山子啼るをききんあまるとま 今此世母丹波の

○アムデナク時鳥ヨムガアルナラ 此ヤリ物と云レテ井ル

ワレニキカレテクレナイ

わきまは啼声ききハ別あり 今此世母丹波の

○ホトギスナク声ヲキキハ 感懐ガオコツテ ハレテキタム

荆楚歳時記
社
能初時先園者
別離とのく客
中子まるとま

おのちハ汝が
おのちハ汝が
未だおのちハ
ありおのちハ
用のおのちハ
おのちハ

カタノ在野ノ一ツテガサナカシウスルルワイ

附者オハ形ノ里ノあやしく何れガちやうとせぬぬあふのう

○ホトギスヨソチハナク里ガアソクモコモアノ文アツテ

コガリテ鳴カヌヨソテ 賞載ニススレトモソレデモ

ウツクシウスル

あひつらとまきめ山は時をうらみれをぬのうり出てを啼

○恋レイ人ヲ恋ヒタシタ時ハ の山の三 に 声ヲアゲテサ

ウツヤナクワイ

四のうらとふうり出れ序のうらとく 恋ニハ紅乃ウリ

古三ノ四

出つてきくとあふとハ 異なりたまきこめあふりうら
のあやうきをこふまきこめあふりうら

声ハくは涙ハをぬ附者ウラウ衣衣のひつとをうら形

○時鳥ハナク声ハシテ涙ハ見エヌガ涙ガトクオレガ袖ガヒ

ツタリトヌレテアルヲ借シテヤラウホトニコレヲチカ泣涙

カクカヨイ

あひつらとまきめ山は時をうらみれをぬのうり出てを啼

○オレハイツシテ泣テツカリ居ルガ アノ時をモオニナヤ

ウニ面多モナシテオレト 誰レガ勝ゾサナキクラベ

人のちハ汝が
のちハ汝が
未だおのちハ
ありおのちハ
用のおのちハ
おのちハ

何やあぐくくよめ
ろいすち子そのお
おん入るるんそ
おん入るるんそ
おん入るるんそ

これと死出の山へ
言つてせんといふ
ははうのにおお
もやめわごま
ん

ヲセウトテ ヒタスヲクワイ

どうそるを時延ましく附せくつやそとをいふねを
てんてつろハ附せくおひもすいふくともあり

とまきう小山へふるす附者二名のうきうハヨクおんあけ

○山カヲ出テ来テモウ里ナレタリガヤニ今并ラ山ハカ丸ナヨ
時者声アリタチハシマイデテコチニ庭テチケ

ミくまのまぢ

やあまて山附者にとづてん日れ世の中すまきいびぬとよ

○山カハ八時者ヤイウチヨット枯テタモコトツテラセウ

ワハモウ世中ニ住ミテグンダワイノレテ連有ワレモ山ヘコモラウ

トムフホトニサウ云テタモ

宛平は附まじのの言れあ合の

紀友則

ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん

○五月雨カリツイテイヨク夜モモヤクヤト物おヒラレ居ル
時鳥が鳴テイクカ夜モフエタニドチラヘイクマラオレモ此ノ

ヤカテハドチナリトモイキクイ

おやうききさやあぐつ時者おあぐつともるてすあ

ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん
ささしおおむひと北布とまきんおあうくつてつちおん

たちまへ時者乃
者ともるハカ

よりノ刃の柄と聲
の宿るのい花枝
庶の書とらふ
あく時のおもて
よみずすのこ

うねが声のこちり
も木の叫ぶやと
のよは程まじり

書くといひあは
すやうなき子
さやうあるも
てのひあはハ
のあやき

あは子あらずと
うねうほ氏さ
まのまじり
あはのうこの
まじりあは
ぬすれあは

○夜ルテクライヨッテトクモイカヌカ又六道ニヨシタカカ
ホトギスカ野モ多イニコノ庭テツカリドウモ色テイセ
ヌアウニクツト鳴テ弁ル

ちね子里

やうとせしを橋もろくわあどやとぎらゝたえぬらん
○宿カッテ居タ橋モ一ダカレセヌニ時鳥ハナゼヨソヘイニテ声モ
セヌヤウニクツヤラ

まのほろめ

及のあはやくとす北バやとぎら鳴てあはやくとあめく免

○子ルカト名バ時鳥ノク声テハヤモウ明方ニクツヤサク
短イ夜カチ 下旬又ホトギスノナイタ一声テ目ガサメガ
ハヤモウ夜カアケル

あめくとおまの如く影の目とする附の岸の群
燈射あめくは夜口
。手杖云初句ののりハガ
のそまて結句のあめく人

まのほろめ

くまうとつれがぬるる夜のよとあはやくとやあく山附香
○日カクレカト名バハヤアヤ女此夜アエリ短サニコ

新撰万葉集の
あの子一頁中
新撰年報郭公
響入謗りあり

リまふ心フテ 郭公アヤウニナクカヤ

紀ノ松峰

及山子恋しき人や入子乃人入るりてきくわきぎ

○フ山へ時鳥の恋しう心フ人ガコモツカレラヌソチヤセラ

声ヲアゲテナク 餘材トシク ちかまろく

歌しらぬ ちかまろく

一その夜啼きあてて時鳥をれうあうぬう声のあそむぬ

○去年ノ夏又舟ニタエズイテヨウツ知テ居ル時鳥

ガ今又ナクアト去年ナイタツ時鳥ガサウズナイカ

古三十七

声ガオナジテチヤガ

時鳥のきくせとてあそくよめ

つゆき

五月色の夜もさびらりし時鳥あそむうらうらよのこゝろ

○時鳥が五月雨ノ空モトド、ヨヒトヨヒタスラ鳴クガ何ド

ヲウイト心フテアノヤウニナクヤラ

さあひみくさのこたのさけらるるふめて

時鳥あつちよめとあうらまがよめ

みはね

さうハ今もさう
と啼くひまは月
これとほきて
よふ古言
あそび夜並
ておとひき
とつちよめさ
ららら月ど
あり

人まら山とらあ
まら山とらあ
のまら山とらあ
まら山とらあ

時鳥カチクカトトテ声モアエヌガ ヨソテ鳴ク声ナ
リトコヘビイテアエバヨイニ ^{コキ}山彦ハナゼニコヘビカガズ
山彦カチキクノ鳴クをまきまきとあめ

泣くゆき

○人か来モセウガト待テ居ル此松山ニ アヤウニ時鳥ガ
ナク今テサボトモ必クシタカニカヨチモ人ヲ待ツ心
ガサツタロイ

古三八

わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ

我と子一とと
我と子一とと
我と子一とと
我と子一とと

をやくすまらるるころり子てわとらきんのみき
らるるをやくすまらるる ぬがこね

わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ

○時鳥ヨソチモオト内ニヤウニ昔カ今テモ志シイカ野

多イニ本ト在野へ鳴テ来タハ昔カ志シイヤラ ^{千代}今もハ

あれもくわま
わらわ方とらあ

時鳥の鳴るるをまきまきとあめ

泣くゆき

わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ
わらわ方とらあ

らやよふてん
らや
うのまはうきせし
せん冠舞子時
つれで用てる
れ子あひくする

法花狂の涌出品
の文子不深世間法
如蓮花在水これぞ
ゆきあり
白氏文集子荷
露難和豈是珠

○世中ラウイ物ニテ泣テラスモノハオビヤカ時鳥ハ
其オビナニドウイフテ世中ガウイトユテ卵ノ
そアタリヘキテアヤウオレト曰ヤウニ啼テラス
葉の露と云てある傍に遍服

はちば葉の露つゆふあまぬりてあまら雲と云てあまら
○蓮世中ノ濁リニソマ又辟言ニ此経ニトイテアルガサウ
云フ清浄ナニテナゼニアヤウニ葉ノ長ヲ玉ト見セテ
人ヌタニスコトゾイ
月のかりりろくろくよあつたキこがら子よめ

少や姫

夏の松まつはまご青ヨヒかきつねつねをそソモのつらつらな月つきややらん

○アヨイ月つきテアツタニ夏なつ夜よ短みイコハ一ひと夕ゆふヨヒニテ

フケル間まモナレニヤ明あタモノコ夜よ短みサズ月つきハ西にしカノ

山やまニテイキツラ間まハアルイガア曉あけノ雲くもノよコラニトツタ

コヤラ

隣となより床とこのなをこひまおそくろくくははつつははつつ

とよきそつりつりらら 久ひさ住すまぬ

床とこををつつねねハハちちうう
つつややとと友とも痛いたす

るまはるまのち
ともやうのふん
アウキをす
あまのいふ

初ふはききう
万葉子往及とう
りう

○手前ノトナツハカトウガ入寐ス床ナツテ 大事ノデガ丹

ル。云ガサイテカラ 塵ハカケイトサ 存スルホト大ウシテ

ガル折テハエニジニスイ。千秋云。此翁上句。三二と
白せ者オシて見せぐ。

三子月の愁。りり。此日ある

る。秋と初ふ空の通ひ。其のく。涼き風やう。ん

○今晚ノテユク。夜ト来ル秋トイキチガウ空ノ通リ道ハ

ソノ夏ノ通ツテユク。斤一方ハダ暑ウテ 秋トホツテス

斤方ハス。レイ風ガフクデアラウカイ

頭書古今和歌集巻第三終

頭書古今和歌集巻第三終

秋上

秋。ら。日。あ。る。 後。原。敏。行。朝。臣

あまのこ。目。は。さ。や。う。ふ。を。ね。ご。風。の。き。よ。そ。舞。う。れ。ぬ。る

○秋ガキタトイフテソレトシキリト自ニ見イヌケレト ケラハ風

ノ音ガニカニカツタテサ コハ秋ガキタトビシクリシタ

秋音ノ人のむのこどももの川あま川せうにえう

し。ら。う。こ。も。ふ。あ。う。り。て。あ。め。る

は。ら。ゆ。き

あまのこ。目。は。さ。や。う。ふ。を。ね。ご。風。の。き。よ。そ。舞。う。れ。ぬ。る
あまのこ。目。は。さ。や。う。ふ。を。ね。ご。風。の。き。よ。そ。舞。う。れ。ぬ。る
あまのこ。目。は。さ。や。う。ふ。を。ね。ご。風。の。き。よ。そ。舞。う。れ。ぬ。る
あまのこ。目。は。さ。や。う。ふ。を。ね。ご。風。の。き。よ。そ。舞。う。れ。ぬ。る

こらあうーま林の
まら風とのあはて
上の岸よりあま

河風のすゞーくもあまうおよばる娘とまき志林のまきん

○川風がサテモア涼イカナ浪モ立ット云ニ秋の来ルノモ

立ットイハ此岸へウチヨセル浪トイツヨニ秋が多クタカ

シラヌ

歌一ツ

よき人あらず

まらせが衣のすそを吹くすゞあづーまき林の初風

○上コハクダラレイ秋風チヤサテモ涼レイモロヨイ

鮮材よまらせこハ女とまきんとのつらいつらまきん

ありこまハ女乃ちあまうー又ま林良持集あま引

まきんこらあうの
上田よりあま

まら風とのあはて
上の岸よりあま

まら風とのあはて
上の岸よりあま

まら風とのあはて
上の岸よりあま

まら風とのあはて
上の岸よりあま

まら風とのあはて
上の岸よりあま

まらせが衣のすそを吹くすゞあづーまき林の初風

まのあまうまきんあまうーまらあま縮糸あまうまら風の吹

○マダ昨日コハ田ラウエタレツレミアイツノ三此ヤウ縮糸あ

まらトシテ 秋風吹ヤウニナツタゾ

秋風の吹く日よりあまうの天の川あまうたあ日つら

○マシハ秋風吹ツタ日カラ毎日々此ヤウニ天の川あ

つりつらつら
今昔のつらつら
今昔のつらつら
今昔のつらつら

なまなつめハ万
美女子織女の二字
とよみそとよみそ
機のももつ助字

○出テ立テ君ヲ又又日一日モナク

。千枝云云の事をいふた
まじつめはあつてよ

つらつら
つらつら

久々の天の川を渡りし者もさうさうさうかたててよ

○天の川を渡りし者もさうさうさうかたててよ

船棹ヲコレヌヤウニカクシテオイトケレイトララ川渡

ツテ丸カリナサル下カナルイニヨシテイソテモコチニ返

苗テアララシニ

天の川もさうと橋も渡せぬたかづつめのかたせしもある

○天の川を橋ニ紅葉ヲ渡スエカシテ時節モ多クニ 柳枝

サガ 秋ヲ指サスル

あひくそ遠村ニよみ天の川を渡りし者もさうさうかたててよ

○一年ノアタ長月日ヲ恋ミテタツタ一度彦星下棚

橋ト此逢サカレ夜ハヨヒギヤドウグ天の川へ雲ガメニ立

テ周ウタテイソテモ 夜ガアケチハヨイ

彦星の正射をぬくのように入らさうかたててよ

云をなれと仰せられし時人ふりつらつら

とよみのつ

あまの川は原を渡りし者もさうさうかたててよ

あまの川を渡りし者も
さうさうかたててよ
あまの川を渡りし者も
さうさうかたててよ

まじぬまじくまじぬ
 まじぬまじくまじぬ
 まじぬまじくまじぬ
 まじぬまじくまじぬ

○此天川の浅瀬ノ所ヲシラヌ故ニオホツカナクテ水ノカラア
 ナヤコチヤトシテヒトツテニタ渡ツテシイモセヌウナニ
 ナ夜ガアチタワイ ナカエ、田の、縁バ
 ハ、ぬすの、ことあり
 曰此附まきといの宮のニカ合れあり
 わらわのおまきを

葵ノらんごつつき棚機ノ年ホひとびあふもあふふ
 ○一年ニタツタ度ヅト約束シテオイタ棚機ノ心ガキマ
 一年ニタツタ度ニテ弁アウガアウカツヤ逢トモモテハ
 七ノ日のおある 凡河内躬恒

古四ノ三

今夜も向らむ此
 せんとくし六ノ
 月のよきうあ
 ちあ子今夜せう
 一人のともか
 るうまきせう
 せらうらうら
 子や織女祭のそ
 新整殿付記子
 せうう座持あ
 新整殿付記子
 せうう座持あ
 こあるよひのあ
 ともあうらう

年ごとくあふはすれど棚機のおもむねれおそす
 ○棚機ハ毎年逢ツツヤハスレハ一年ニタツタ度ツチハ逢
 シヤル夜祭ハサスナイモチヤヤ
 棚機ハ向らむ此の
 ○タチバタ祭リヨヒ手向テオ借シヤシタ糸クヤウニ長ウ引レ
 テココカラモ年々シウ此ヤウニ思シウ思テ月日ヲタテルコ
 トデアラウガ 是ハセタマアあるおのがおれお
 影ハ
 影ハ
 影ハ

ヤミヤミと云ふ
めづらひまじり
名をぬすまひ
鳥の居る所の
命のまじり
るものか
もせず
イ階
るや

○今夜九人ニアウヤイ今夜七人のヤニヨツテ 棚機ノ久
シイ年ノ間ヲ待ツテヤカテヨチモ久シウ待ツヤウチ中
ニ九ノモアラウホトニ

七人の松花咲きあり 深おねやまれば相長

くふふふとくふふふ 附ハ天の川邊をなさまふ神をひぢぬる

○サアモウト云テ 別レルトキハて又天川ヲ渡リモセヌサキニ
此ノウニ袖ガヒツリト涙テサヌレタ

やううの日はあゝ ちのたぐみね

乃おのふ今こえそのぬりさうらうらとあゝ 結後ふま

○夕バ夕振キツノ 今自カラニテ 又今カラ来年七月廿日昨

日ヲサイイカノトとスラ 移テ月日ヲ夕サツヤルテエラマ

ト必ス

移テらるゝ ちんす

二のまよりありき月の影を九はんばるゝの杖をまかり

○木枝間カラモテ九月ノ影ラニハ 廣く見九よチカウテ

スツツモカ見キキ 廿ノシキナ物ガヤ 是ラニハ 今カ

ラ總体モゴトシキナ秋ガキタテ

大さの松くさうふらうききあゝあゝのまねま

大さ九す
をこま
ひらく

こころに秋のついで
さうめくやをまき
ついでをよるまき
のあつきのまき
らびへ

詩に秋風を相ま
入る秋風を相ま
先有

○世間二日秋かきカラシテ人コヤウニナイサウチニオヒト
リカサ秋カキシイ物ガヤトホシシ多秋オシ種ノ秋デハ
ナキ世間二日秋ガヤニ

秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで

○オシ悲シクもみウタタニ来ル秋デモナイニ虫声ヲキテ入

ヨリサキヘシガ番ガケキ オシカシイ

おと秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで

○草木ノシク色ガヌツテ葉デククハ木ノシクニテ丸ガ

ヤガオツテササ物ニシクニテ九時節ノシクヤトホシシ

よひに秋のついで
ひ又秋のついで
さうめくやをまき
ついでをよるまき
のあつきのまき
らびへ

このあまのついで
よひに秋のついで
さうめくやをまき
ついでをよるまき
のあつきのまき
らびへ

秋ノ物ニシテモ秋ハ悲シキ 秋ノ物ニシテモ秋ハ悲シキ

ひよめくやをまき ついでをよるまき のあつきのまき

○さうめくやをまき ついでをよるまき のあつきのまき

さうめくやをまき ついでをよるまき のあつきのまき

ノヤウニシルワイ

あまのついで秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで

りては秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで秋のついで

○イツハ物ハヌトキガヤトホシシ時節ノ差別ハナシニテモ

うらありのつねを
言中五合の中は
秘蔵芳令と云
それと非の差
と云

物名にアテテトウウ子毛秋ノ夜がイッテ物名
ニスル頂上カヤウイ

かむあつは法が子人とおつまうて林の板
とむあつまをらういひまあ

こつ林

法がハハ際の内も、林盡後盡までいふその
以得の内子ある本字をのてその舎れ果る本
したるおむかむぬりのつねも、露の落しとあ
まより、吳名すなれと盡字、言中、特謂之

古語ノ六

とーとあふハハ
とのこむあふ
愛らととあふハハ
とーとあふハハ
まお其あふ愛の字
まもとーとあふ
このまも夜のあ
け初子あふまも
まもまも、情の字
子あつてまもあ
あ

歌集子系まも
かまあり新撰

盡とあるこれ之器の盡とを別ありあふこれれ
くま

くづりせとあふ板せつづりまねてあふん今ま
○コレホト面白イアツタ秋ノ月夜ヲ寐テウテ

ガト明スモアツウカサウレタ人テガサキコエヌチヤト

あしル 縁杖つづりの花よりいづれまもあ
秘つづりあふんあ

影いづ

あま人あふ

白や小をねあふいぶ雁れ数さへあふ林のよれ月

あふも影さとお
アとく左の影も秋
天飛翔雁影見
あり

白氏文集子燕
子樓中霜月夜秋

○サテモサヤカナ月カナ 西へトクホト言イソラソ ツレダ

ツテトニテヲ雁ノ数ニデガヨウ見え 。千秋云々ねう
ちうういハづく

つもつゝあうゝ雁と雁とおとあふべかちりて飛こころを
そりあうゝ雲とくちうちうちをくまわあうゝ

さよ伴と秋はあゆめど 雁のぬのさあさき月もさきめ

○夜ハイカウフケタモウトニト夜半ニツタサウチ見ハ雁

啼声ノ波元ズトソラウチモウ月ガハツタ

長夜ニこの秋は言合ふよあ

大江千里

月ハバちふおとを 懸く 花影身ひとの秋はあふ

古四ノ七

兼准一人長とあ
ると千里ハ揚子
江ハ昔ハよあ
よあ

今の幸子松さき
とあれど古幸ヌ
忠告集子松れ
がであをうい
あくとあれハ
ハ松子ハ初ま
とまの子のし
てつもの其ま
用ひハ子ハ
の松ハ持のつ
ひ

月ヲ見ハオホイウト物がサ 悲シイワイオレヒトリノ
秋ハナケド

たごね

久々の月れろくも秋ハさね紅葉すれど思おささらん

○月中ナ桂ハヲふ土ノ木ノヤウニ秋ハヤトニテモ 紅葉スル

ナト云フアリソモナイモフヤニソモヤツハリ秋ハモミチ

スルカシテイツモヨリハ光リガテリハサツタ 紅葉スルタニ

ツレバヤウニ照リハサツタアラウ 秋ハモミチ

月とよあ 在来エ方

くまの山々や
まの山々や
まの山々や
まの山々や
まの山々や
まの山々や

この山々のま
まの山々のま
まの山々のま
まの山々のま
まの山々のま
まの山々のま

秋の夜は月の光り〜わろたはくまの山も裁ぬつゝあり
○此は月ノ光ノカイ秋ノ夜ハナホ間イクラフ山テモ裁
レウト名ハレル

人の心もあつたはまきぐすのあきくまき

まきくまき

まきくまき

○此は亭主まきぐす心苦ガオホウテイロノノヲ名フテ
夜ノ長イヲ唄シカテルトイハレガ 此亭主アノキリク
ト内ヤウニマリ泣カレナキ 心苦カ多ウテ秋ノ夜ノ長

古四ノハ

イガメイワチノハまきぐす 柳者サナホノトヤワイ

絲材打波まきぐす

是貞ミとのあはれさ合のろこ

やまきの朝衣

秋の夜はあつたはまきぐす 柳者サナホノトヤワイ

○此はイ秋ノ夜ノアナルモシラスアヤウテク虫ハオガヤウ

ニアレモ物が悲シイカシラス

秋〜す

よまき人あつた

秋の夜はあつたはまきぐす 柳者サナホノトヤワイ

このまきぐす
まのまきぐす

とらう

○秋風吹クカニアレ始メテ雁ノ声ガカスル雁ハ遠方カラ

状ヲクヘ掛テ持テ来ルトモコトヤガアリ鳴雁ハゴカラ

冬状ヲカケテキタコトヤヤラ

歌

よき人あらず

コトカトテ縮負名ガナクニシレテハ丹風ニ雁ガキタワイ

キツウ早ウケア雁ハナイタコトヤ 色ノ下ル木ノモモ

ロクニモコトヤモセヌウチニ

縮負名ハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ
コトヤハコトヤ

古四ノ上

春霞ノ中ハカスミ見エナイ交雁ガワノ時ノ霞上内ニヤ

ウニ秋ノ暮カノウノカテアレ今サ又ナクワ

夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴クニシレテ 裁ノ下葉

モウツロウタワイ

此ノ人ハ人のいふとくまのいふとれ人まらふと

空氣ハ附きさいの言ハれんあうと

夏ノ昔根朝長

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

古四ノ下

丁のこころと舟く
名子すゞしくも愛
カレく文辭ニテ携
来とていふ声と
携とていふ声と
あつて声と帆
物とて舟と
そと

秋風小声をよまわげてくる船の舟子のとほる雁もをみる

○アレクアノ妻ノ海ノウチニシテ 秋風ニ声ヲ言フ帆ノウチ

ニテケテ 船ノウチ見テ来ルモノハ 鳴テカレ雁ノウチ

カノの鳴るるを愛てよめる

うたをよみてつゝねて雁がねれかきこるは秋のまゝく

○雁ノウチモツラナツテ鳴テカレウチニオトク秋ノ夜ノウチ

ノノ救ヲオモヒツクテカレ毎夜ノ泣テカアカスワイ

是を見みよの寂れあふのうと

万葉あし山ちりく
秋やせらふまきこぞ
燕のきこえきこつ
いねぞあま

かき

山裏秋をよみ小びりくはあふの鳴る音小目とまゆつ

○山裏イツモト云ウチニ秋カガ 別ニテツラウナキニ思ハレ

ワイヨルク燕ノチク声テ目ヲサシテハ 夜ハ長シ何ヤラカ

ヤラト難美ナコヲ名ヒツケラレテサ

よま

おく山子ゆきちりやこひ鳴燕のきこえあふれは秋のき

○秋ハ悲作カナレイ時節チヤガ 其秋ノ内ニスドウイフ

時カイツチ悲シイゾトイハ 紅葉モモウ美テシマウタ

多事多事...
まことれどと...
も妻のてして子
の交すあふん...
令至解随園随
華ふも説あり
妻一く千金秋日
元子之く六概
男と云ふの

名あでむれど...
○女即上名カヨイニ
子ヨツト馬カラオリテ見タバカリ
ガヤヅカナズオガ女ニオチタト人ニ云テハナイゾヨ
ふ林云そのく...
のてありま...
とハ云あり...
ら...
修...
あ...
や...
古

二...
ね...
か...
ふ...
さ...
し...
三

万...
と...
お...
と

○ア女即花...
テサ通り過...
ガヤト...
是...
コ...
林の...
○ト...
ガ...

上のふと贈答の
やうな歌

こゝろふとつづて。後村おぼこま子こまをさす

日ろくし。子林必きまあふあふくでも。常のあせ
をたれてたあまて寐と寝ぬとまを常

歌

そのよけ

女をさすつづて。野へやさうせ。あれく何のあせや。ま

○女節をさすつづて。野へやさうせ。あれく何のあせや。ま

ナ名ガタウカシラヌ。女郎ト云ハ名ガカリテコソアレホ

ニノ女デモナイニ

米菴院のまき子ア。合子よまきくまのりら

左のおねいさうちまこ

五百四十七

まき子ア。秋の秋風おあひま。いひとらせたまふよ。らん

○ヨミナシガ。秋野ノ風ニヒカ。タレ心ヲヨセテアヤウニ

ナビラヤラ。いひとつよのあふ。いひとつよのあふ。

後系定方朝臣

秋あふで。逢てかてま。女をさすつづて。野へやさうせ。あ

○天川コソタダ。タノ秋デナウテハ。アヌ所ナレ。アノ女郎を

アヌ川ノカハラニ。エテアルデモナイニ。秋デナウテハ。ア

コガナリガタイ。女チヤ

はらうま

このあふと贈答の
あふと云うは
一本子天のあふ
とあふとあ
るせめてちりの
あふとあ
べ

まゐりて見ると
まゐる

うらめしくハコが
うらのんをひま
どるぬめあ
ゆておちつるま
がわとわく物ど
あつらんゆとな
まゐりて見ると

○女ゆちヨ 此野原ヲノヤウニホニシラシテヒトリニおくと

ニテバツカリ居ヤウヨリハオガヤドウツシテ植テ見ヤシテ

ヤラウモノヲ 作材ヲあつるべし。お波コシ。云ひ

こつとハ一ウとあつあるすしハあつる
女の男をさへくひりあつるすしハあつる

ゆのハあつるゆのハあつるゆのハあつる

ゆのハあつるゆのハあつる 善覚王

カトセうしあたまもせきあわれるあつるあつる

○アノ女郎ハ、ハアレタヤトニ 見レハ人モツカズニ 別々一人居レ

ハガテモアキツカイナ物カナ

○寛平の村人おのせれこもさる野原をさむと

てあつるたつる村人としてさつるさつる

ゆのハあつる

平よさむ

あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる

○又ノナ色ニ花ヲハライツハイ エカズニオセニヤウニカハ

ルヤシラ 女郎をさるアル所デ ヨヒハ子ヤウデアツタモ

ノヲ 女上名ナレバヨイトマリ野原ヲ

見見との家此あ合すあめ

ゆのハあつる

ゆのハあつる
ゆのハあつる

ゆのハあつる
ゆのハあつる

種々言ふ事ありて
形子様より書き
と云ふ事ありし
子も亦た香の
且つその香ハカ
子修く幾ばあ
実子考ハワラ
て居き事あり

あわくせう世
人の口ハあま
帰子ハたのしみ
るが此集の例

か子人かきくぬきかきく後を及々林と小野へせあやを

○此子ハカハハハカタ何人著テヌギカテオクタ襦ッ

毎年秋末此野ニテホス今此ヤウニホウハナ

モトハナタイテイノ人ノ襦ッアルイヨクモクソク

○襦ッ香がヨウシテアルユエテアラウ

後襦ッをよみて人子つりて

後襦ッをよみて人子つりて

せりせり人のあまきう後襦ッはるきき香ふりあひつ

○此後襦ッハイツノ此方デオトリナサレタモテ形足

古ヤノ

いささうのあり
てうくあまらん
すぐくぬきん
とあまらん
軒あまらん
あり

イテ以後リナサツタ襦ッテコサルカ今ニワスレガタイ香がホフ
テサモテイヲオナツカニウ存ズル
あぢぢぢまじまじ
るせり

ぬいぬいぬいぬい白の林の野小波ぬきうきう後襦ッをよ

○此子ハカハハハカタ野へタガヌイテ掛テオクタ襦ッ

主ノレレヌ香がサニホウテアル

歌

平

をよりうきてふスド花すき初子出林ハハハハハハ

○スキトコモタサニアル物チヤガソレヤトウモセウツガナイ

これハ袖と袂とを
てあや子とてあ
さく袖ハ衣子と
たひとくハ袖の
袂や背の方と
と

チヤガ今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ柱テハ又ヤウ
ニモウグアノヤウニ薄ノ穂ガテ秋ノケレキガ又エバキツ
物カレウテナギナワイ だよハ多クとものこと
備材ふのさきやさきゆるず
寛平ハ耐きさいの宮れあふのさ

在系おねやさ

杖の跡此子のたれくさすき初まどまねく袖と見せらん
○スキホノ風テナヒクハテウト人が色ニテ 意レイ入ラニテ
袖ヤウニエエガ スキ穂ハ 秋野ノ穂作ノ草ノ袖カレラ

古ヤサ

やましくおでーハ
子ある紅拂色の茶
心茶ハこの園より
へより生れハふ
をせしきさるを
の茶葉ハ唐や
一とまこれハ
やましくこれハ
まよハあ

又此の山く袂と袖とハ行と入るのふてはド
まの 千枝云々やうは
の枝の葉あふる
まの 枝の葉あふる

まの 枝の葉あふる

これのまあまでとあそんまぐす 噂タガのまあとさぐニ
○キリク스가噂テオモシロイユカゲニ入ラニ咲テアルハ撫子
ト云思ラ 母親ヤ乳母トモ打ソウテトモくニテウアイス
ルヤウニタシモカシモスセテ賞讃サセタイモノヤニタツタ
一人ノ手デソダテル思ノヤウニ オヒツカリガアヨイ思ヤトニテ
独リ見ハヤサウーカヤ アツタラ此花ラ

このこじんさんま
めまこまをま
にわかぬれども日本
紀子結婚のニヤと
こまこまもこま
をまこまのあま
ハネのひもくと女

の下細き方々の
おのちもやとわれ
はゆ

月を八分、赤州
よのあめのおく古
ハネますん

うの勝ハ太おの
石上のうまこま
の清心

餅持持のほちうー、おまろろー

歌ーい

よま人あす

まろろろひつつ草まままハ見一杖ハ色まのままあろろ

○ 春見々時三々、皆内じまいッ子ガヤトバツカリ石フダガ

サウデハナイ 秋ニッテ今見バ、コレサウナイロクケサヌゴトナ

チヤワイ

まままのまれひもまま杖の持ちまひたれん人子やまあま

○ ソウタイまろろろ細クノット云チヤガ 此ヤウナイロクセツノ

まろ花帶紐トイテミダレアル面白イ 秋野デドレヤコ

古マサニ

キモノヲ愛護シテも、ニミダレテ、アウラツシサウ人

ガヌタナラ、アハヤ何事、チヤトニニラダエガ、元セ

元セ

月子をころもすん朝あまぬれてのちまろろひぬやま

○ キルモノヲ月子をむデスラ、エイ色ナ物ガヤ、シカガ外ハ色

ノウツリヌイ物ガヤニツテ、朝ツユニスラ、色が外モ

ハウクテモハカモシレヌガ、チイサ、後ハウクダトシテモ

仁初のまろろみこあろ、まろろろ付まのたまま

後せんとしておろほろろろまろろろ母のあまま

群のらへま
のまわくあうの
ともま今もあま
く八群とのと
そ

まきつる所不庭と杖のふつそくかあ物
かうのついでまよそそるるる

傍に遍服

里へおれてふつうの^ヤ新^ヤ庭もあまきも杖の群うを

○世^ヤトノ^ヤ美^ヤハ^ヤ里^ヤア^ヤレ^ヤミ^ヤタ^ヤ里^ヤ之^ヤ佳^ヤデ^ヤラ^ヤリ^ヤス^ヤル^ヤ者^ヤハ^ヤ老^ヤ人^ヤ之^ヤ杖

レ^ヤミ^ヤス^ヤト^ヤ諸^ヤ事^ヤ不^ヤ都^ヤ合^ヤナ^ヤ宿^ヤニ^ヤエ^ヤカ^ヤ致^ヤレ^ヤミ^ヤレ^ヤテ^ヤ庭^ヤモ^ヤ籬^ヤモ^ヤ

乃^ヤ後^ヤ下^ヤサ^ヤレ^ヤマ^ヤス^ヤト^ヤあり^ヤト^ヤト^ヤヤ^ヤ杖^ヤ野^ヤ原^ヤデ^ヤボ^ヤリ^ヤト^ヤス

上^ヤ方^ヤの^ヤニ^ヤツ^ヤの^ヤオ^ヤウ^ヤト^ヤ心^ヤを^ヤろ^ヤく^ヤる^ヤ。

頭書古今如致集巻を殘巻第4

